

名誉会員八木健三先生のご逝去を悼む



2005年10月日本火山学会懇親会(札幌)にて

日本火山学会名誉会員八木健三先生は、2008年7月18日、入院先の札幌の定山溪病院で内臓疾患のため亡くなられました。享年93歳でした。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

八木先生は1914年(大正3年)9月5日、長野市で旧制中学校長八木貞助氏の3男として生まれました。父君は長野県の地質研究者として著名な方でした。八木先生は旧制第八高等学校に入って地質学鉱物学の河村信一教授の指導を受け、地球科学に興味をもつようになりました。それを決定付けたのは1933年夏、2年生のとき浅間山の「峰の茶屋」前に東大地震研究所付属の「浅間火山観測所」が設立し、父とともにその記念式に参加したときの感動でした。式典には地震研究所長石本巳四雄教授と寺田寅彦教授や若手の坪井忠二・津屋弘達学士などが参列していました。その翌日、八木父子は鬼押出し溶岩の巡検にも参加しました。晩年八木先生は、そのとき溶岩の流下機構について寺田・津屋両先生の激しい討論に強い感動を受けたと述懐しています。

八木先生は1935年に東北大学の理学部岩石鉱物鉱床学科に入学し、神津叔祐・渡辺万次郎・高橋純一教授らの指導を受けました。1938年、先生は卒業論文「四阿山火山」を提出して東北大学を卒業し、直ちに副手となって神津教授のもとで研究を続け、助手・講師を経て1941年に助教授となりました。当時先生はサハリンや根室半島のアルカリ岩の研究で優れた成果をあげ、1949年に理学博士の学位を取得しました。

八木先生はその直後に渡米し、1年間 Colorado School of Mines に学び、次いでワシントンのカーネギー研究所(Geophysical Laboratory) で N. L. Bowen 博士の指導の

もとで J. F. Schairer 博士と二価の鉄を含むケイ酸塩 $\text{FeO-Al}_2\text{O}_3\text{-SiO}_2$ 系の相平衡の研究を始めて完成しました。これは先生にとって最初の実験岩石学の成果で、その後ライフワークとして実験岩石学の研究を進めることになりました。

米国から帰国後、八木先生は1951年に東北大学教授となり、1962年には北海道大学の理学部地質学鉱物学科に原田準平教授の後任として招聘されました。いらい1978年の定年まで16年間、先生は鉱物学講座を担当して鉱物学・実験岩石学の研究・教育に尽力するとともに、広く火山学をはじめその他の分野で活発な研究を続けてきました。この間1960年に再度カーネギー研究所の客員研究員、1965年にピッツバーグ大学客員教授、さらに1975年にはメルボルン大学客員教授として招かれ、実験岩石学その他の研究をおこなっています。

火山研究では先生は早くから故郷信州の火山調査をはじめ、強健な体力でフィールドを調査し、噴出物の産状を調べ、岩石記載を続けていました。北海道有珠山の昭和新生成(1943-45年)では新ドーム溶岩(デーサイト)の岩石学的性質を明らかにし、水上武・石川俊夫両教授とともにその成果を *Bull. Volcanol.* (1951) に公表しています。その後、先生は国内外の多数の火山を歩き、火山の分布・構造・噴出物・マグマの起源などについて多くの研究成果をあげてきました。これらの成果は鉱物学・実験岩石学などを含めて内外の学会誌・紀要などに公表され、その数は1978年北大定年までに論文139編、著書7冊におよんでいます。先生は関連学会や若い研究者のために、内外の新しい研究動向の解説や自分が参加した多くの国際会議・野外巡検などの報告も多数書いています。

八木先生は戦後1956年、日本火山学会の活動再開いらい委員として運営にあたり、1976-77年には委員長を務め、学会の発展、火山研究の促進に貢献しました。1987年には日本火山学会名誉会員に推挙されました。先生はまた日本鉱物科学会、日本地質学会、スウェーデン地質学会などの名誉会員でもありました。また1972-81年には日本学術会議員に選出され、発展途上国学術協力問題特別委員会委員長を務めました。

北大定年後、八木先生は北星学園大学教授(1978-88年)として教育に尽力しました。先生は研究・教育のみならず、自然に親しみ、北大教授時代はワンダーフォー

ゲル部顧問を務めました。さらに北海道の自然保護運動にも情熱をもって取り組み、著書「北の自然を守る」(1995)を公にしています。

八木先生は正義感が強く、オープンな性格の方で、内外に多くの友人をもっていました。生前、先生は自分の誕生年について筆者に「君も寅年生まれだそうだが、ぼくのは寅は寅でも五黄の寅」と言っておられました。広辞苑にも「この星の生まれの者は運気が強く……」とあり、その人生は素晴らしいものでした。先生はフィールド・旅行中はもちろん、会議中でもスケッチブックと絵筆をはなしませんでした。そのスケッチブックは375冊にもなると伺っております。先生のレポートには、よく

そのスケッチが掲載されていますし、「私のワンデリング」といった画集も刊行されています。友人の一人は「もし私に才能があったら、片手にハンマー、もう一方の手に絵筆をもった Ken Yagi の彫像を作りたい。」と述べています。

去る9月8日、ちょうど八木先生の誕生日の翌日、札幌市内で知人・友人・門下生をはじめ、ワンダーフォーゲル部、自然保護協会の方々など約300名が集まり、先生のお別れ会がおこなわれました。会葬者は信子夫人が用意された八木家の庭に咲いたラベンダーを献花して先生を偲び、安らかなご冥福を祈りました。(勝井義雄)